The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宋～明代
Author(s)	吾妻, 重二
Citation	中国研究集刊. 2013, 56, p. 24-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58707
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　號号（総五十六号）平成二十五年六月　二四―三四頁

〔特集一〕

〔学界時評〕宋～明代

吾妻重二

ここでは二〇〇九年から二〇一二年までの四年間、宋代から明代に至る思想に関して、どのような研究成果があげられたのかを日本の学界を中心に述べたい。もちろん、この時期の関連論文や著書はきわめて多数にのぼっており、紙幅の関係上、それらをもれなく取り上げることはできない。よって、ここでは個々の論文は割愛させていただき、単行本を中心にコメントすることとする。もちろん、単行本に限っても思わぬ遺漏はあるかと思うが、あくまでも筆者の管見に入ったものということで取り上げ、また、論評するよりも紹介することの方を心がけたい。いわば一定の情報提供を行なうことで大方の参考に供したいと思うのである。

儒教関係の標点本・排印本

儒教研究に関していえば、いわゆる標点本その他、中国における資料整理に注意する必要がある。これらは研究の基礎資料となるものであり、我々としてはたえず目配りしておくべきものなので、はじめに紹介しておく。

まず、朱傑人・厳佐之等編『朱子全書　外編』全四冊（華東師範大学出版社、二〇一〇年九月）の刊行がある。二〇〇二年、すでに『朱子全書』全二十七冊（上海古籍出版社）が出版され、史上初めて編まれた朱熹の全集として我々に多大な便宜を提供してくれているが、本書はその「外編」と銘打ち、朱熹が編集にかかわった他の思想家の著作を整理、収載している。すなわち蔡沈『書集

伝』、石懌『中庸輯略』、程顥・程頤『程氏遺書』および『程氏外書』、謝良佐『上蔡語録』、朱松・朱棹『韋斎集』附『玉瀾集』、張栻『南軒先生文集』の七種である。ここで初めて標点本になった文献も多く、きわめて有用である。これらを繙いていると、朱熹がいかに多くの書物を編纂したか、その精力的な仕事ぶりにも改めて気づかされる。

王守仁の著作に関しては、呉光等編校『新編本 王陽明全集』全六冊（浙江出版聯合集団・浙江古籍出版社、二〇一〇年十二月）が出版された。そもそも呉光氏らは一九九二年、三十八巻本『王文成公全書』を底本として、『王陽明全集』上下冊の標点本（四十一巻、上海古籍出版社）を出版していたのだが、その後、王守仁の他の著作や語録等を広く調査補充し、全五十四巻に拡大して出版したのであって、今後、王陽明全集の定本として用いられることになるであろう。

北京・中華書局の「理学叢書」も引き続き刊行されており、郭彧整理『邵雍集』（二〇一〇年一月）が新たに刊行された。『観物内篇』『観物外篇』『伊川擊壤集』『漁樵問対』など、邵雍の主要著作を網羅する。難解な『観物内篇』『観物外篇』に関しては整理者による注をつけているのも貴重と思われる。

北京・中華書局からは「易学典籍叢刊」も刊行され始めた。近年における標点本の出版としては、朱熹『周易本義』（廖名春点校、二〇〇九年十一月）と程顥『周易程氏伝』（王孝魚点校、二〇一一年五月）がある。ただし、前者が朱熹原本の十二巻本ではなく通行の四巻本を底本にしたのは理解に苦しむ。『周易本義』は古易テキストへの復帰を意図して十二巻に編まれたのであって、読みやすいからという理由で四巻本を採用するのはあまりにも便宜主義的であり、「易学典籍叢刊」の価値を落とすことになるのではないかと懸念される。一方、後者は、理学叢書の標点本『二程集』から程頤の『易伝』部分を抜き出したものである。

王梓材・馮雲濠『宋元学案補遺』全十冊（中華書局、二〇一二年一月）の標点本も刊行され、人名索引がついていて便利である。また、『宋元学案』や『明儒学案』を補うものとして李清馥『閩中理学淵源考』上下冊（二〇一一年十二月）、熊賜履『学統』（二〇一一年六月）が鳳凰出版社から「理学淵源考辨叢刊」として排印出版されている。

もう一つ、楊復『儀礼経伝通解続巻　祭礼』十四巻が葉純芳・橋本秀美編輯により出版されたことも特筆される（全三冊、台湾・中央研究院中国文哲研究所、二〇一

一年九月）。底本となったのは、かつて戸川芳郎教授が和刻本『儀礼経伝通解』解題（汲古書院、一九八〇年）において注意を喚起した元刻本であり、静嘉堂文庫（陸心源皕宋楼旧蔵）に蔵する天下の孤本である。葉純芳氏らは同書を三ヶ月かけて手書きで写しとったというから、その精励ぶりに驚かされる。この書は朱熹『儀礼経伝通解』の続編であり、句読点を施した活字本として公開されるに至ったことはまことに朗報というべきである。中国儀礼の研究はなお未開拓の部分が多く、本書はそのための重要なテキストになるであろう。

朱子学・陽明学その他

さて、宋明時代の儒教研究に関する包括的な出版物として呉震・吾妻重二主編『思想与文献 日本学者宋明儒学研究』（上海・華東師範大学出版社、二〇一〇年四月）が刊行された。この書は戦後日本における合計二十二名（京都大学に留学し博士号を取得された呉震教授を含む）の関連論文を中国語訳して収載している。いわば日本の宋明儒学研究のエッセンスを知ることができるものになっているので、ぜひ一読をお薦めしたい。収載された各論文はもともと日本語で書かれたものなので、明記された原載誌等から、もとの日本語の論文を捜して読むことも容易である。

道統論的衰退与新儒林伝的展開　荒木　見悟
関于体用的歴史　島田　虔次
従《詩集伝》看朱子的思想—以《国風》為中心　友枝龍太郎
朱子哲学中的〝太極〟　山井　湧
朱子的歴史意識　三浦　國雄
論李默本《朱子年譜》—与明代学術的展開相関聯　佐藤　仁
朝鮮版《朱子語類》考　藤本　幸夫
朱子《家礼》与《儀礼経伝通解》　上山　春平
《太極図》之形成—囲繞儒仏道三教的再検討　吾妻　重二
《周易参同契考異》之考察　吾妻　重二
程頤思想中〝理一〟之特性　土田健次郎
朱熹《雑学辨》及其相関問題　市来津由彦
作為思想伝播之媒介的書籍—朱子学〝文化歴史学〟序説　小島　毅
陸九淵的〝当下便是〟是〝頓悟〟論**吗**—〝即今自立〟哲学序章　小路口　聡

《王文成公全書》的成立—兼述《伝習録》的形成　山下　龍二
《伝習録》在日本—日本陽明学的素描　吉田　公平
閻東本《陽明先生文録》的价値　永冨　青地
楊慈湖在陽明学時代的重新出場　呉　震
明代余姚的《礼記》学与王守仁—関于陽明学成立的一个背景　鶴成　久章
良知現正論者的考察—従渾一与一貫的試点出発　荒木龍太郎
李贄的経世論—《蔵書》的精神　佐藤錬太郎
従劉宗周到陳確—宋明理学向清代儒教転換的一種形体　馬淵　昌也
〝中国近世〟的思想空間　伊東　貴之

中国の学者は日本語の論文をほとんど読まないので——日本の中国学者は英語の論文をあまり読まないが、それ以上に読まない。日本語の論文抜刷を渡しても、ほとんど読んでくれないので拍子抜けすることが多い——、このようなかたちで中国訳することはたいへん意味のあることであり、実際、すでに中国や台湾において反響が現われている。

中国語訳ということでいえば、二〇一〇年十二月、日本中国学会理事長（当時）の池田知久教授の尽力により方旭東主編『日本学者論中国哲学史』（華東師範大学出版社）が刊行されたが、これは日本中国学会賞を受賞した哲学・思想部門の論文二十二篇を翻訳、収載したもので、宋明思想に関する論考も多く含まれている。

『朱子語類』の訳注は故溝口雄三教授の呼びかけにより全国の宋代思想研究者を中心に研究班が作られ、現在、作業が分担して進められている。二〇〇七年以来、汲古書院からその成果が少しずつ刊行され、この四年間においては次の三冊が出版された。

巻十・十一（読書法 上下）　興膳宏、木津祐子、斎藤希史（二〇〇九年六月）
巻七・十二・十三（小学・持守・力行）　垣内景子（二〇一〇年十月）
巻百十三～百十六（訓門人一～四）　垣内景子（二〇一二年七月）

『朱子語類』は全百四十巻からなる豊富多彩な内容をもっており、これほど大部な講義・問答録が中国において空前のものであることはいうまでもなく、世界的に見てもたぐい稀な分量を持っている。筆者もこの訳注作業に加わっており、訳注作成の面白さと苦労は身をもって

知っているつもりであるが、いずれにしても宋代のみならず伝統中国の知の解明とアピールに裨益するところの多い出版物であり、今後も刊行が待たれるところである。

朱熹の思想については、木下鉄矢『朱子〈はたらき〉と〈つとめ〉の哲学』（書物誕生　あたらしい古典入門、岩波書店、二〇〇九年一月）および同氏『朱熹哲学の視軸――続朱熹再読』（研文出版、二〇〇九年九月）がある。これらにおいては朱熹の著作のテキスト解読に多くの紙幅が割かれており、朱子学に哲学的に肉薄しようとする著者の関心が際立っていて迫力がある。

藤井倫明『朱熹思想結構探索――以「理」為考察中心』（中国語、東亜儒学研究叢書九、国立台湾大学出版中心、二〇一二年二月）は、「理」を初めとして「誠」「工夫」「格物致知」「心」など朱子学の主要概念を厳密に検討し、朱子学の思想的構造を探ろうとしたところに特色がある。筆者は国立台湾師範大学准教授で、本書は中国語で書かれている。

吾妻重二『朱熹《家礼》実証研究』（中国語、呉震・郭海良訳、上海・華東師範大学出版社、二〇一二年五月）は、冠婚喪祭のマニュアルである朱熹『家礼』に関する研究である。これまでの関連論文を中国語訳して出版したもので、中国儀礼研究および『家礼』の研究に一定の貢献をなしたものと考えている。また後半の「宋版《家礼》校勘本」は数多くの関連テキストを用いて『家礼』本文を詳細に校勘したもので、『家礼』テキストの決定版を企図したものである。

朱熹に関しては他に三浦國雄『朱子伝』（平凡社ライブラリー、二〇一〇年八月）が出版された。これはかつて講談社から「人類の知的遺産」シリーズとして出版された名著『朱子』（一九七九年）を、伝記部分を中心に改訂したものであり、わかり易い朱子学入門書となっている。

吾妻重二『宋代思想の研究――儒教・道教・仏教をめぐる考察』（関西大学出版部、二〇〇九年三月）は、儒教のほか、道教や仏教思想に関して宋代を中心に幅広く考察した論文集である。周惇頤、『性理大全』、中国近世宗族、張伯端『悟真篇』、宋代の景霊宮、二程の墓、岩波文庫『孟子』などの諸問題につき新たな考察を加えている。

陽明学もしくは心学については吉田公平『中国近世の心学思想』（研文出版、二〇一二年十月）が出版された。本書は吉田教授の長年にわたる中国心学研究の集大成ともいえる力作である。心学への深い共感に裏付けられ、宋代・明代・陽明学、現代新儒家をめぐって個別研究を

行なうとともに、心学の現代的意義を問いかけるものとなっており、重要な研究成果となっている。ただし、もちろん中国近世思想は心学がすべてではないから、心学以外の思想や学術（朱子学や清朝考証学）をどのように評価し位置づけて思想史を再構成するかは、なお今後の課題として我々に残されていると思われる。

中嶋隆藏『静坐　実践・思想・歴史』（研文出版、二〇一二年四月）は、宋明時代にクローズアップされた自己修養方法＝静坐をめぐる歴史的考察である。隋唐以前、宋代の朱熹、明代、江戸時代、清末民国などの各時代における「静」「静坐」の思想を、豊富な資料にもとづいて論じている。静坐はいわゆる「哲学」の領域からはみ出す「身体技法」の一つであって、中嶋教授は六朝思想史の専門家であるが、研究対象を広げ、中国近世・近代および日本にまたがるこのような意欲作に取り組まれたことに敬意を表したい。

このほか、注意すべき著作として井川義次『宋学の西遷――近代啓蒙への道』（人文書院、二〇〇九年十二月）がある。本書は十六世紀から十八世紀にかけてイエズス会士によってヨーロッパにもたらされた宋学の情報がヨーロッパの哲学界にどのような影響を与えたのかを詳しくたどった研究であり、後藤末雄『中国思想のフランス西漸』（一九六九年）、堀池信夫『中国哲学とヨーロッパの哲学者』（一九九六年、二〇〇二年）に続く成果である。「西欧近代理性の形成にとって、宋学からの影響が相当大きなものであった」（同書、終章）と述べておられるのは、東西の文化交渉の重要性を明らかにするとともに、宋学（朱子学）＝前近代的、西欧＝近代的という、現在広く定着している「常識」のドグマ性に疑問を投げかけるものであって、今後いっそう展開すべき課題を提示していると思われる。

なお、飯山知保『金元時代の華北社会と科挙制度――もう一つの「士人層」』（早稲田大学出版部、二〇一一年三月）は、金および元の科挙制度を中心とする歴史的考察だが、士人層の形成や思想史にもかかわる興味深い内容をもっている。

道教・民間信仰・イスラーム

道教に関しては、この時期、「道教典籍選刊」シリーズとして明・陸西星『南華真経副墨』（蔣門馬点校、北京・中華書局、二〇一〇年三月）の標点本が刊行された。陸西星は道教内丹術の道士として知られる人物である。「道教典籍選刊」ではこれまでも道教関係の重要文

献が整理、出版されており、引き続き作業が進められているといえる。

山田俊『宋代道家思想史研究』（汲古書院、二〇一二年六月）は、宋代の老荘思想および道教に関する筆者の近年の研究を集成したもので、宋鸞、太宗『逍遥詠』、晁迥、陳景元、王雱、呂恵卿、董思靖、林希逸、褚伯秀らに関する論文を収める。「あとがき」でいわれるように、宋代の老荘思想研究はここ十年ほど中国で急速に進められてきたが、日本ではほとんど未開拓の領域であって、貴重な研究成果となっている。

高橋文治『モンゴル時代道教文書の研究』（汲古書院、二〇一一年十二月）は、全真教の勃興と、これを阻止しようとする仏教側との「道仏論争」を王族の発令文や公文書を活用して照射した研究である。「全真教文書の性格とその展開」「発給文書から見たモンゴル時代の道教」の二章に分かれ、道教を宗教史的にたどったものではないが、逆に、従来の道教研究にはない文献実証的特色をもっている。

近世を中心とする民間信仰に関しては、二階堂善弘『明清期における武神と神仙の発展』（関西大学出版部、二〇〇九年二月）および同氏『アジアの民間信仰と文化交渉』（関西大学出版部、二〇一二年八月）の二著が刊行された。前者は哪吒太子、玄天上帝、華光と関帝、八仙らの考察を含み、後者は伽藍神や妙見神、真武神、地蔵菩薩に関する考察を含む。これらの神格はもっぱら近世時期において中国から周辺の東アジア地域に広まり変容していったもので、筆者の研究によって初めて素性や来歴が明らかになったものも多い。

近世時期の民衆史・道教史研究における第一人者であった故酒井忠夫教授の『中国日用類書史の研究』（国書刊行会、二〇一一年一月）も出版された。本書は一九五八年に書かれた酒井教授の論文「明代の日用類書と庶民教育」を増補改訂したもので、宋元明清時代の民衆史・教育史等に関して必要な文献学的知見を披瀝してくれている。さらに『酒井忠夫著作集』第五巻「道家・道教史の研究」（国書刊行会、二〇一一年二月）も刊行された。この書は前篇「道家・道教史」と後篇「宋代以後の儒教と道教」に分かれており、特に後篇は中国近世の民衆レベルの思想研究として示唆するところが多い。

このほか、堀池信夫『中国イスラーム哲学の形成――王岱與研究』（人文書院、二〇一二年十二月）もある。明末に生きた中国ムスリムである王岱與を中心に、中国におけるイスラームの展開を詳しく考察したもので、近年、急速に浮上してきた中国イスラームの研究をリード

する著作として注目される。これに関しては、明末清初の中国ムスリム学者、劉智の『天方性理』の訳注も青木隆・佐藤実氏らの努力により近く岩波書店から刊行されると聞いている。

また堀池信夫編『知のユーラシア』（明治書院、二〇一一年七月）は「ヨーロッパと中国」「イスラームと中国」「中国」の各篇に分かれ、中国と東西文化交渉につき壮大なパースペクティヴをもつ論文集となっており、宋明時代にかかわる論文も含まれている。いわば中国を中心とする異文化間の交流・交渉の研究につき、今後の期待を抱かせるものになっている。

東アジア的視点

ここ数年ほどの間、「東アジアの文化」に対する関心が顕著になってきている。これは、かつて東アジア地域が「漢字文化圏」「儒教文化圏」といった文化的つながりをもっていた事実が再認識されるようになったことと関係がある。中国の文化は周辺の地域・国々に伝わり、影響を与えるとともに変容を遂げていったことが改めて注意されるようになったのである。東京大学の特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」（「寧波プロジェクト〔にんぷろ〕、二〇〇五年度～二〇〇九年度）、関西大学の私立大学学術高度化推進事業「学術フロンティア」による「アジア文化交流研究センター」（CSAC, 二〇〇五年度～二〇〇九年度）、関西大学のグローバルＣＯＥ「文化交渉学教育研究拠点」（ICIS, 二〇〇七年度～二〇一一年度）などは文部科学省の支援にもとづく大規模プロジェクトであって、いずれも東アジアの思想文化の交渉史を視野に収めている。

また、国立台湾大学が二〇〇五年十月に設立した人文社会高等研究院が進めてきた東アジアの文化と儒教経典に関するプロジェクトも同様の関心のもとに遂行されており、二〇〇四年六月の黄俊傑『東亜儒学史的新視野』（台湾大学出版中心）に始まる「東亜文明研究叢書」シリーズも数多くの成果物を刊行している。

このような「東アジア」の視点をもつ近世思想研究関係の成果をあげてみよう。

吾妻重二・朴元在編『朱子家礼と東アジアの文化交渉』（汲古書院、二〇一二年三月）は、韓国国学振興院および上記の関西大学グローバルＣＯＥが二〇〇九年十一月に韓国で共催した国際シンポジウム「朱子家礼と東アジアの文化交渉」での発表論文を収載している。中国、台湾、日本、韓国、アメリカ、カナダ等の『家礼』

研究をリードする代表的研究者が力作を寄稿しており、充実した内容になっていると思われる。

井上克人・黄俊傑・陶徳民編『朱子学と近世・近代の東アジア』（日本学研究叢書九、国立台湾大学出版中心、二〇一二年三月）は、二〇一〇年九月、関西大学で開かれた「朱子生誕八八〇年記念国際シンポジウム」の論文集である。中国・台湾・日本の研究者の論文を収めるが、中国語の論文は日本語訳され、すべて日本語の論文集となっている。このような日本語の書物が台湾から出版されるというのもたいへん面白い現象である。

馬淵昌也編著『東アジアの陽明学　接触・流通・変容』（学習院大学東洋文化研究叢書、二〇一一年一月、東方書店）は、国際シンポジウム「東アジアの陽明学」および学習院大学東洋文化研究所における「陽明学の現在」プロジェクトの成果を収めた論文集であり、日本・台湾・韓国の陽明学的研究者により、日中韓それぞれの陽明学が持つ多彩な側面を描き出しそうとしている。

学習院大学ではまた、二〇一一年十二月、大澤顯浩編『東アジア書誌学への招待』第一巻および第二巻（東洋文化研究叢書、東方書店）を刊行している。これらは東アジアに広まった漢籍の重要事項につき論じており、とりわけ第二巻は宋明以降の状況を幅広く論じていて教えられるところが多い。

また、松浦章編『東アジアにおける文化情報の発信と受容』（関西大学アジア文化交流研究叢刊第四輯、雄松堂出版、二〇一〇年二月）は、上述した関西大学「アジア文化交流研究センター」における成果の一部であり、思想のほか儀礼、言語、歴史などの諸領域をめぐって新たな研究成果を収めている。

仏教に関していえば、石井公成編集『新アジア仏教史10　朝鮮半島・ベトナム　漢字文化圏への広がり』（佼成出版社、二〇一〇年五月）が刊行され、近世・近代における東アジアの仏教を考察している。朝鮮やベトナムの仏教までも視野に入れた仏教史はこれまで稀であったことを考えれば、本書の斬新さが知られるというものである。

このほか上記「寧波プロジェクト」の成果としては、「東アジア海域叢書」シリーズが二〇一〇年より汲古書院から刊行されている。

シンポジウムその他

この間、宋明時代の思想に関する国際シンポジウムも多数開催されている。すでにいくつか紹介したが、他に

管見に入った限りでも、朱子学に関しては清華大学の陳来教授・華東師範大学の朱傑人教授を中心に二〇一〇年から「朱子学国際学術研討会」が開催されており、二〇一一年には厦門大学を中心として「中国朱子学会」成立のシンポジウムが開かれている。これらに関しては『日本中国学会便り』二〇一一年第二号に報告があるので参照されたい。

二〇〇九年十一月には中国杭州で「陽明学派国際学術研討会」が開かれ、論文集として銭明編『陽明学派研究――陽明学派国際学術研討会論文集』（杭州出版社、二〇一一年一月）が刊行された。また、朱舜水に関しては二〇一〇年十一月、国立台湾大学で「朱舜水与東亜文明発展」の国際シンポジウムが開かれ、その論文集として徐興慶編『朱舜水与近世日本儒学的発展』（国立台湾大学出版中心、二〇一二年十月）が出版されている。これらにはいずれも日本の研究者が多数参加している。

このほか、二〇〇九年九月に「東アジア文化交渉学会」が成立したことも紹介しておきたい。この学会は上述した関西大学グローバルＣＯＥ「文化交渉学教育研究拠点」が中心になって組織したもので、これまでの年次大会開催は次のとおりである。

第一回　多元文化交渉への新しいアプローチ　二〇〇九年六月　関西大学

第二回　東アジアにおける文化交渉　二〇一〇年五月　国立台湾大学（台湾）

第三回　辛亥革命とアジア　二〇一一年五月　華中師範大学（中国）

第四回　災害と東アジア　二〇一二年五月　高麗大学校（韓国）

これらのシンポジウムにおいては、メインテーマの発表のほかに多くの分科会が設けられ、日本や中国はもちろん、台湾、韓国、ベトナムなどの研究者が参加する大規模な学会となっている。年次大会の第五回は二〇一三年五月、香港城市大学で「描かれる新しい世界：東アジアの歴史・文化と未来」をメインテーマとして開かれる予定である。

なお、中国学に関する情報収集・処理の技術やツールは近年、大きな進歩をとげている。これに関しては漢字文献情報処理研究会編『電脳中国学入門』（代表：二階堂善弘、好文出版、二〇一二年二月）が役にたつので付言しておきたい。

このように見てくると、この四年間において宋明思想に関して豊かな研究成果が生み出されてきたことがわかる。朱子学や陽明学など儒教に関する個別研究のほか、

道教、仏教、民間信仰、イスラームなどに関する研究、儒教の再評価、東アジア的視点による刊行物や国際シンポジウム開催など、豊穣な文化世界への目配りが広がりつつあるように思われる。今後、広範な視野と精確な実証性をそなえた研究がより多く現われることが期待されるのである。